

『言志四録』

佐藤一斎著、川上正光訳／講談社

『言志四録』とは、江戸時代後期の儒学者佐藤一斎（1772－1859）がまとめた4巻の書物、『言志録』『言志後録』『言志晩録』『言志耄録』を指す。原著は漢文で書かれているが、本学初代学長である川上正光先生によって現代語訳され、注釈を付されたものが、今回お勧めの一書である。

江戸時代、幕府の学問所として江戸に昌平校が置かれていた。現在のJRお茶の水駅の北側にあり、今ではその地に湯島聖堂があって漢詩・漢文や中国古典を学ぶ殿堂として親しまれている。毎月一回、ここで開かれる論語の素読会に筆者も出席している。当時は学問といっても儒学が中心で、論語をはじめとする中国古典が教科の中心だった。佐藤一斎はこの昌平坂学問所で塾長となり、後には総長となった人物である。その弟子3千人と言われ、幕末維新に活躍した多くの人物が彼から直接、間接の影響を受けた。

4巻のうち、最初の書『言志録』は佐藤53歳のときに、最後の『言志耄録』は82歳のときに書かれたもの。いずれも幕府学問所での日々の講義の中で気づいたことを書き溜めたものであり、人生に指針を与える示唆に満ちた言葉にあふれている。論語などの古典に取材したものもあれば、佐藤独自の着想に基づくものもある。4巻全体は1133条からなっているが、西郷隆盛はこの中から100条余りを抜き書きしたものを冊子にしていつも懐中に入れていたという。

この中から有名なせりふを紹介しておこう。『少くして学べば壮にして為すあり、壮にして学べば老いて衰えず、老いて学べば死して朽ちず』という言葉。2001年の衆議院本会議で、学びの社会の構築という視点が重要ではないか、という野党議員の質問に応じて、当時の小泉純一郎総理大臣が、好きな言葉としてこの言葉を紹介した。原文は

「少而学。則壮而有為。壮而学。則老而不衰。老而学。則老而不朽。」

川上先生はこの言葉を次のように現代語訳している。

「少年の時学んでおけば、壮年になってそれが役に立ち、何か為すことができる。壮年の時学んでおけば、老年になっても気力の衰えることがない。老年になっても学んでいれば、見識も高くなり、より多く社会に貢献できるから死んでもその名の朽ちることはない。」（言志晩録の60条、80頁）

実に平易な表現である。しかし、川上先生の現代語訳本は単なる現代語訳ではなく、随所に川上先生独自の追加がある。この条についても沢山のオマケがついている。まずは佐藤一斎がこの条を書くにあたっての出典についてのオマケ。

「ところで、朱子の編著になる『近思録』為学類に、『学ばざれば、すなわち老いて衰う』とある。或いはこれを一斎先生が見て、本文を作られたのではないかと思われる。」

川上先生の現代語訳に先立ち、戦前に「修養大講座」というシリーズの一書として「言志四録」の解説書が出版されているが（平凡社、昭和15年刊）、そちらを見てもこの出典についての解説は無い。現代語訳にあたり、川上先生が広く古典類を参照されていたことが分る。

この条にはお茶目な解説も付け加えられている。先の引用に続けて川上先生は次のように書いている。

「頭を使っている人は長生きであるともいわれる。だから、本文の第三句は、老いて学んでも、（役に立つ学び方と役に立たない学び方があるから）名は残らないかも知れない。しかし、健康にはよいわけだから、『老いて学べば、寿し』^{いのちなが}といった方が無難であるようにも思われる。これは一斎先生には内証の内証にしておいて下さい。（もっとも一斎先生は長生きもされ、名を残してもおられるが。）」

また、「少、壮、老とは何歳をいうのか」と質問されたときに、「それらは年齢というよりも、＜気持ち＞と考えたらどうだろう」と答えた挿話をはさみ、今度は米国の実業家サミュエル・ウルマンの“*Youth*”と題する英文詩を引用している。

*Youth is not a time of life, it is a state of mind.
It is a temper of the will, a quality of the imagination,
a vigor of the emotions, a predominance of courage over timidity,
of the appetite for adventure over love of ease.*

“若さ”とは人生の一時をいうのではない。

それは心の状態を言うのだ。
^{たくま}逞しい意思、優れた想像力、
^も炎ゆる情熱、^{きょうだ}怯懦を乗り越える勇猛心、

あんどつ
安逸を振り切って冒険に立ち向かう意欲、
こういう心の状態を“若さ”というのだ。

このように、川上先生の注釈は古今東西を駆けめぐる。

* * * *

最後に川上先生について補足しておこう。川上正光先生は1912年栃木県生まれ。1935年に東工大の電子工学科を卒業し、東芝勤務を経て、東工大で教員生活を始めた。川上先生の手書かれた教科書『電子回路』は当時エレクトロニクスを学ぶ学生にとっての代表的な教科書だったそうだ。東工大の学長時代に本学の基本構想をまとめ、本学開学と同時に初代の学長となられた。本学のモットーであるVOSも、本学の古いロゴマークも、そして「技学」という言葉も、すべて川上先生の創案になるものである。

川上先生は、専門の電子技術以外の主題について多くの本を書かれた。中でも『工学と独創』、『日本に大学らしい大学はあるのか：日本文化の興隆は大学教授の創造力の向上から』、『脳のはたらきと独創』、『科学と独創：日本人の独創力啓発のために』、『独創の精神』などは、大学論、教育論、独創性などに関する川上先生の見解が書かれており、あわせて一読を勧めたい。なお、『工学と独創』の一部である『エンジニア心得帖』は筆者の技術者倫理の授業でもしばしば紹介させていただいている。

川上先生は、入学式や卒業式でも、用意した原稿から離れて突如黒板に向かって古今の名句を書かれたりしたそうだ。そうした広い見識の上になって本学の基礎が築かれたわけで、私はそのことを誇りに思う。本学に学ぶ皆さんにも、是非、川上正光先生の精神の一端に触れていただきたいと思う。



執筆者紹介

三上 喜貴 (p. 54)

原子力システム安全系／システム安全系／経営情報系教授。専門領域は、技術論、技術者論、安全マネジメント。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『言志四録 1 言志録』 佐藤一斎著 川上正光全訳注 講談社（講談社学術文庫）
1978年 1,050円

『言志四録 2 言志後録』 佐藤一斎著 川上正光全訳注 講談社（講談社学術文庫）
1979年 1,050円

『言志四録 3 言志晩録』 佐藤一斎著 川上正光全訳注 講談社（講談社学術文庫）
1980年 1,155円

『言志四録 4 言志耄録』 佐藤一斎著 川上正光全訳注 講談社（講談社学術文庫）
1981年 1,103円

『工学と独創』 川上正光著 共立出版 1977年 品切

『日本に大学らしい大学はあるのか：日本文化の興隆は大学教授の創造力の向上から』 川上正光著 共立出版 1989年 品切

『脳のはたらきと独創』 川上正光著、本間三郎編 朝倉書店 1980年 品切

『科学と独創：日本人の独創力啓発のために』 川上正光著、本間三郎編 朝倉書店 1979年 品切

『独創の精神』 川上正光著 共立出版 1978年 品切

ブックガイド目次へ